

Vergin, tutto amor

作詞者 不詳。

作曲者 ドウランテ (Francesco Durante, 1684－1755)。D.スカララッティの後を継いだイタリアの重要な作曲家。本人にオペラ作品はないが、ペルゴレージやパイジエッロなどナポリ楽派で活躍した多くの作曲家を育てた。ナポリ楽派は17世紀末から18世紀にかけてオペラに新様式を確立させていった作曲家たちのことをいい、活動の中心地がイタリア南部のナポリであったためこのように呼ばれている。その様式は、オペラの目覚ましい発展に大きく貢献し、ベル・カント唱法の発展や古典派交響曲の分野にまで影響を及ぼした。

楽曲解説

この曲は宗教音楽を多くつくった彼の作品らしいPreghiera (プレギエーラ)、つまり祈りの曲である。題名にある「愛に満ちた処女」とは聖母マリアのことであり、^{さんげ}懺悔と願いの心情を訴えている。

取り扱い上の要点

- 12拍子の流れるような伴奏にのせて歌うこのメロディーは、おのおののフレーズが長い、ブレスをしっかりととり、息をつなげてレガートに歌い上げることで美しさを出せるようにしたい。
 - この曲の伴奏は、当時のスタイルである通奏低音 (例えばチェンバロとヴィオラ・ダ・ガンバの組み合わせなど) を意識し、左手の低音をしっかりと弾いてそのラインを浮き出させ、歌のラインと絡み合っあやをなすようにするとよい。また、右手の刻みはあまり大きくせず、軽い音で弾き、歌と低音を補助するように心がける。
 - 10小節目の1オクターヴの跳躍を無理なくきれいに歌うには、間にある1拍分の休符を、ブレスと同時に発声の切り替えに利用するとよい。息を吸いながら、声を出す前に上の響きに意識を集めておき、そこから声を出すつもりで歌い出すこと。
- 原語歌詞の発音、逐語訳、対訳…本書p.83
伴奏譜…別冊p.28

Lascia ch'io pianga 私を泣かせてください

作詞者 ジャコモ・ロッシ (Giacomo Rossi, ?－1731)。イタリアの詩人・翻訳者・台本作家。18世紀初頭にロンドンに定住。

作曲者 ヘンデル (Georg Friedrich Händel, 1685－1759)。ドイツで生まれ、イギリスに帰化。J.S.バッハと並ぶバロック時代最大の作曲家。ハンプルクで作曲家として活動を始め、イタリアで活躍。帰国後にロンドンに出て歌劇を上演し、好評を博す。1712年、二度目にイギリスに赴いたまま定住し、27年には市民権を得る。主にイタリア語や英語詞による40以上の歌劇を発表した。

ピアノ伴奏編曲者 伊藤康英 (→本書p.69)。

楽曲解説

このアリアはイタリア語詞による歌劇『リナルド』(全3幕)の第2幕でアルミレーナ役のソプラノによって歌われる。T.タッソの原作『解放されたイェルサレム』をもとにしたA.ヒルによる台本の原案をG.ロッシが完成させたもので、ヘンデルがイギリスで上演した最初の歌劇である。

『リナルド』は十字軍時代の物語。若く勇敢な騎士リナルドと軍司令官の娘アルミレーナは愛し合っているが、それに嫉妬する魔女アルミーダは魔法でアルミレーナを連れ去り、幽閉する。それを機に関係を迫るイェルサレムの王アルガンテに對して、アルミレーナがこのアリアを歌う。

曲はサラバンド風のリズムで作られ、奥ゆかしい女性の深い悲しみが静かに歌われる。

取り扱い上の要点

- 曲の構成はダ・カーポ・アリア式で、実際にはABAの3部形式となる。ダ・カーポ後、2回目のAの部分で歌う際、記載された旋律に装飾を施すのが慣例だが、生徒全員に要求する必要はない。
 - 旋律線に入っている4分休符では、あまりブレスをとらない方がフレーズ感の出る演奏になる。
 - 作品中では、このアリアの前にレチタティーヴォがあり、オペラの構成についても学習させたい。
- 移調譜 (ハ長調) …別冊p.20